



Title	鼎談 「ああいう変なことを大学がやれるとは！」 : 歴代センター長が語るCSCD11年の冒険
Author(s)	中岡, 成文; 金水, 敏; 三成, 賢次
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 10-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55645
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鼎談

「ああいう変なことを大学がやれるとは！」

— 歴代センター長が語る CSCD11 年の冒険

中岡 成文 × 金水 敏 × 三成 賢次

PROFILE

中岡 成文 | Narifumi Nakaoka

2005 ~ 2006 年度 センター長

ヘーゲル哲学をかなり異端的に研究したあと、現代や日本の思想へ視野を広げた。実践的・社会的な観点から、臨床哲学の創始・展開に参加し、科学技術コミュニケーションにも関心を持って CSCD の創設に関わった。

金水 敏 | Satoshi Kinsui

2007 ~ 2010 年度 センター長

大阪大学大学院文学研究科で国語学専門分野を担当する。日本語文法の歴史的变化を中心的な研究対象とするが、一方で「役割語」という新しい研究領域を創始し、領域横断的、国際的な研究推進をめざしている。

三成 賢次 | Kenji Mitsunari

2011 ~ 2015 年度 センター長

専門は法学のなかでも基礎法学と呼ばれる西洋法史、とくに近代ドイツ法史の研究に取り組んできた。これまでも法学と科学技術の連携などに関心を持ってきたが、対話をめぐる CSCD の新たなミッションに期待している。

— 新たな回路づくりの仕掛け

— CSCD の立ち上げの経緯から伺いたいと思います。もともと当時総長だった宮原秀夫さんの「デザイン・センター」構想を受け、その中心を担った鷺田清一さんの中で揉まれて出てきたものが「コミュニケーションデザイン・センター」だったと聞いています。

中岡 宮原さんの掲げる「デザイン」と鷺田さんが進める「臨床コミュニケーション」が融合したのですね。

三成 私は立ち上げの委員会から関わって最初のメンバー採用の面接なども担当しました。どういう人を選ぶかをめぐって喧々諤々の時期もありましたが、集まった人を見るとそれぞれユニークですごい人たちでした。

中岡 当時「コミュニケーター」とか「メディエーター」という呼び方をしていたと思いますが、「対話回路をつくる人、もしくはそれを実践する人」を養成する組織が大学に必要なのではないかという理念を打ち出して CSCD はスタートしたのですね。分野は、臨床場面と科学技術、医療メディエーションなどが当初念頭に置かれていました。

三成 当初からアートも入っていたように思いますが。

金水 研究とアートプロジェクトを組み合わせた「アート阪大」というようなものがありましたね。

— 理系・文系の学部や分野を横断した動きが具体的な形に実を結んだのは、やはり鷺田さんの手腕だったのでしょうか。

金水 そうです。鷺田マジックというのでしょうか（笑）。当初は同床異夢で、誰も全体像を知らないまま召喚されて、「こいつは何なのだ？」と互いに思っていたでしょうね。全学共通機構のような組織を除けば、これだけ各学部が連携した組織を実現させたのは阪大が初めてですから。

中岡 そのような中、私は突然センター長をやれと言われて、青天の霹靂でした（笑）。鷺田さんに、「センター長は猛獣使いなので、よろしく」と言われたことをよく覚えています。

三成 CSCD の施設は万博記念公園内に設けられましたね。

中岡 あえて大学の外の場所につくったことを含めて、新しいこと、

実験的なことをやろうという雰囲気がありました。

—— あの頃、メンバーの中では「大学の中の外、外だけれども大学」というようなことをよく言っていましたよね。



【写真1】壁一面をホワイトボードにした万博記念公園時代のミーティングルーム。こうした空間デザインは学内の教室の先例となった

金水 私は当初 CSCD の外にいましたから、「何かおもしろそうなものが万博にできていいなあ」という感じで見ていたのです。今でこそ部屋の壁一面をホワイトボード [写真1] にするなんて普通になりましたけれども、当時は新しい感じがしましたね。

中岡 当初は研究スペースすら大部屋をブースに仕切ったもので、まともな部屋じゃなかった。あえて隔離せず、皆がお互いに見渡せるように、ということにこだわっていたのです。

金水 ある種の「高揚感」を共有していたと言いますか、事務職員も含めてスタッフ全員が何かよくわからないけれども一体となってやっていくというような雰囲気があった。学外という場所で他の部局から隔離されていたからこそ、すごく実験的なこともできたんでしょう。

中岡 教育においても、鷲田さんはよく外に行けと言っていましたね。学内の教室だけで授業を行うのではなく、むしろ外へ散って活動するべきだということが彼の発想でした。

金水 学生を巻き込んで一緒になって外に出る。だから「人材育成」「研究活動」と並んで「社会学連携」というミッションが最初から組み込まれていて、従来の学内における座学とか演習とか、基礎教育でないことをしなさいということだったのでしょ。

—— 今考えると、鷲田さんは OJT (On the Job Training) を念頭に置いておられたのだと思います。コミュニケーション能力を身につけるといっても、今ある回路の上で上手に情報を流通させることではなく、回路がないところに新しい回路をつくるということを構想されていたのでしょうか。回路のつくり方は結局教えられるものでないから、猛獣をいっぱい連れてきて楽しそうに動いているのをその場で学生に見せるのが一番有効な教育だ、というようなことを言われていました。時間と空間を共有するということをすごく重視されていたと思います。

金水 それはかつての旧制高校がそうで、ある意味、理想的な教育システムだったということですね。アメリカでも寄宿舎に全

国からいろいろな優れた人材が集まって、それぞれ同じ釜の飯を食うということが人材育成の面で企業や政治の基盤になっていたわけです。

中岡 時間と空間を共有させたことは、裏を返せば一種の危機感もあったのです。もともと異質な人たちが集まっているのですから、そうやってコミュニケーションをとるしか回路をつくる方法がなかったとも言えるのです。

——「行きずりの人との対話」「目的を持たない対話」の可能性

—— 先ほど「実験的」と言われましたように、我々は異分野の人たちが集まって従来の学術とは異なる、ある種、格闘技のような取り組みをいろいろ行ってきました。そこでは「何かこれまでの大学にはない新しいことをしなければいけない」という意識も共有していたと思います。その中で化学反応を起こすと言いますか、イノベーションにつながるような場面などはありましたか。

金水 非常に印象的だったのは、学内向けのオープニングイベントで平田オリザさんがワークショップをされました。今から考えたらちょっと恥ずかしいけれども、皆ネッカチーフみたいなものをつけて参加したのがとても新鮮でおもしろかったですね。

中岡 平田さんのワークショップのスタイルは、やはり CSCD の一つの特徴なのではないでしょうか。それは従来の学術の世界とは全然異質のもので、パフォーマンス的な要素を学内に持ち込んだことは大きいし、一定の役割を果たしたと思います。私が記憶しているのは、伊藤京子さんがやっていたロボットの社会実証実験です。私もメンバーに入って刺激をいろいろ受けました。

金水 CSCD の開設後まもなく大阪梅田のビッグマン前広場でやった「カフェバトル」[写真2]も斬新でした。研究者がガチンコで入れ替わり立ち代わり、6時間におよぶトークイベントをやりましたね。



[写真2]カフェバトル。センタースタッフ全員が公衆の前で対談を行った

—— 「カフェバトル」は、中岡さんと久保田テツさん、木ノ下智恵子さん、花村周寛さんと本間の5人が頭を突き合わせて、パブリックに打って出るつもりで取り組んだのを思い出します。

金水 あれが一つの原型になって、学内の「オレンジカフェ」や京阪なにわ橋駅のアートエリア B1 での「ラボカフェ」、「知デリ」（アート & テクノロジー知術研究プロジェクト）などに展開されています。人が行き交う場所で“行きずりの人”と対話するという発想は、大阪大学の中では CSCD から始まったと言ってもいいと思います。

—— “行きずりの人”と対話する、つまり特定のコミュニティを相手にしないという、そういう覚悟がありました。そこに「アート」という観点がありましたね。「アート」はどこにも属さないものですから、“はみ出ることを良しとする”という思考があったのかもしれない。



【写真3】アートエリア B1 での10周年記念イベント「知のジムナスティックス」

金水 ビッグマンもそうですし、アートエリア B1 [写真3] でいろいろな「カフェ」をやったり、ファッションショーをやったり。あれも前代未聞でしょう。後にも先にもないですね。この先、日本でああいう変なことを大学がやれるとはとても思えないです。

中岡 あれはやはり人員の妙ですね。事務の方たちもよく付き合ってくれました。普通ならば絶対止められていたはずですが、誰も止めなかった。それは先にお話に出たある種の「高揚感」を皆で共有できていたことがすごく大きかったです。

金水 CSCD のセンター長になってから、私もおもしろがりなのでよく混ぜていただいて、自分でも企画していろいろやりました。ある種の化学反応を期待していたのかもしれない。しかし化学反応はそう簡単には起きないもので、だいたい苦い思い出ばかりが残っています。でもあとから振り返ると、苦い思い出でもやってよかったと思うのです。

中岡 金水さんがそういう言葉を使われるのは意外だな。

金水 だいたい思い通りにいかない。でも思い通りにいかないものだということを学べる。最初に思っていた通りにいかず、その場で困るのです。人が来ない、あるいは人が来すぎるとか、思いがけないことを発言する人がいるとか。それでも、やってよかったと思うのです。

中岡 金水さんは CSCD に関わることによって、そういうふうに変わったのですか。もともとそういうタイプではなかった？

金水 私自身は CSCD によってすごく変わりました。変えていたと言ったほうがいいのかもしいない。センター長にして学生だったのです。アカデミズムの中央で仕事をしているという自覚を持ちつつ、それだけではなく、その蓄積も使いながらカフェなどを通じていろんな人と触れあっていないと、かえておもしろくないという体質になりました。

中岡 私の場合は CSCD に関わる前から臨床哲学を始めていたので、アカデミズムに対するスタンスは既に変わっていたところがありました。ただ、実際に“行きずりの人”と関わったことはまだそれほどなかったもので、そういう意味では CSCD でさらに変えられたという感じはします。その中で、化学反応の話からはずれるかもしれないけれども、あえて成果主義ではない方向に行ったことが一方で CSCD の限界になったのではないかという気もするのですけれども。

金水 成果主義とか数値主義に徹底的に対抗していくのだというコンセプトがあったから、逆に今はとてもやりづらい状況にあると思います。結局、コミュニケーションデザインというものは、人に転移可能なものではなかったから。それは CSCD 構想のプレヒストリーとも言える COE プログラム「インターフェイスの人文学」(2002～2007年)もそうだった。「インターフェイスの人文学」って何だろうとずっと議論したけれども、結局、結論が出なかったのです。つまり対話はやっても絶対に失敗するのです。失敗するのだけれども幸せなのです。そこがすごく大事なことで、やり続けないといけない。

三成 逆に言うと成功が何がわからない。

金水 最初に成功だと思った像は間違っているのだということに気づくことが最大の学習です。

中岡 対話の回路をつくるのであって、対話そのものをつくり出すわけではない。誰かが対話をつくり出すとすれば、それはすごく暴力的な話でしょう。だから対話の回路を工夫するということだとは私は理解しています。

三成 法律の世界について言うと、裁判などはその最たるもので、論点を明確にしてそこからはずれるものはどんどん捨象していく。そうやって論理を研ぎ澄ましていき、白か黒かを決めていく能力を養っていくのが法学における教育です。しかし、その結果はいったい何かというと、結局納得できないような

ものになっていることが多いのです。

個人的には以前からそういう疑問があって、法学教育の限界のようなものを感じていました。そういう時に、明確な目的を持たずにただ語るという、CSCD が取り組んでいる「対話」というものが実は非常に深い意味を持っていることがわかってきました。その認識は、CSCD に来ていろいろな人と付き合う中で少しずつ強くなってきましたね。

例えば、CSCD のセンター長になるまでは、アートというものはよくわからなかったけれども、リーディング大学院の「超域」プログラムの入試で、平田オリザさんが学生に劇を創らせたり、ビデオを創らせたり、紙芝居を創らせたりするのを見ていると、グループで話し合う中で、それなりの結果が出ます。ちゃんと対話しているグループは何かしらまとまったものができる。一方で一人が好き勝手なことを言っていた、それをコントロールできないグループでは本当にまとまらない。また、議論が十分なされていないと、形だけできても中身は全くないということもある。アートというものは教育でもあり、コミュニケーションでもある。それを私も初めて目の当たりにして、こういうことなのかと思いました。

— コミュニケーションが価値転換をもたらす



[写真4] 知(De)リ。研究者とアーティストらが表現や技術について対話する

— お話をまとめますと、コミュニケーションデザインという取り組みが化学反応としてあぶり出せる部分と、潜在的にしか機能しない部分があるということですね。化学反応としては、事務も含めて空間的な共有の場をつくり、初の大学院カリキュラムというものをつくり、「カフェバトル」をはじめさまざまなイベントを実現しました。さらに「知(De)リ」[写真4] や「ラボカフェ」のような継続的なイベントを行う常設スペース（アートエリアB1）もつくりました。そういった数々の業績は、化学反応の成果だと思うのです。一方で、化学反応ではあぶり出せない潜在的な機能とは何なのか。

金水 うまく話が結びつくかわかりませんが、最近親の介護をするようになって、医療というものは結局博打ではないかと思う

ようになりました。例えば「こうすれば命が延びますよ、病気が治りますよ」というのは詐術ですよ。かつてはそういう形で「こんなに5年生存率が延びました」と言ったわけですが、その中身は全然問われなかった。それが今は緩和ケアとか終末期医療といったことが当たり前と言われるようになり、ある種、減らしの美学というか壊しの美学というものが受け入れられる土壌がつくられつつあるのが一つの流れかなと思うのです。

中岡 私がセンター長をやっていた時の印象深い話をしますと、岡田美智男さんというロボット開発者がつくったロボットが非常におもしろいのです。ロボットの主流は、人間のために何ができるかといった足し算の発想で考えられているのに対して、岡田さんのロボットは引き算の発想で、人間の力を引き出すとか人間のほうが何かしてあげたくなるロボットづくりをコンセプトにしている、私はそれがすごくいいなと思ったのです。

金水 それは平田オリザさんと一緒にロボット演劇に取り組まれた石黒浩さん（基礎工学研究科）の研究とも通じますね。「さよなら」というロボット演劇には、死にゆく少女に対して、ただ詩を朗読することしかできないロボットが出てくるのです。

—— お二人がおっしゃっていることは、皆がある方向を向いている時に「こっちの方向もあるよ」と別の方向を指し示す方向指示器みたいなものが大切だということでしょうか。従来の評価軸ではどうも評価されない、減らすとか壊す、引き算といった発想は、ある種の価値転換や方向転換を含みつつも、設計という発想自体をなくすわけではない。言葉を変えると「リフレーム」です。本当はそういうリフレームの機能をコミュニケーションという潜在的な軸の中で担おうとしたということですね。

金水 要するに我々全員が専門などは関係なく、当事者にならざるを得ないのです。だからその時に効いてくる発想のリフレーミングのしかた、つまり別の見方もできるのだということ、すぐにはわかってもらえなくても学生たちに伝え続けなければならぬのです。

三成 一方で、小林恭さんが「座学」とコミュニケーションの関係をめぐる指摘されていたこと〔小林・高田 2010〕も見逃

せません。従来行われてきたオーソドックスな、いわゆる「座学」的な教育と CSCD が志向するアクティブラーニング的な教育との違和感のようなものです。

—— 小林恭先生がおっしゃっていることも十分アクティブラーニング的ではないでしょうか。CSCD のすべてが目に見えやすい形でのアクティブラーニングだけを志向しているのとはちょっと違うと思うのです。「座学」と表現されるものの中にも対話の要素はあるんじゃないかと。

三成 ご自身がワークショップなどを取り入れた教育をするわけではないけれども、CSCD に来たことでインパクトなり影響を受けられたことは確かな感じがします。実際、オーソドックスな教育もするし、アクティブラーニング的な教育もできる金水さんのような両刀遣いの人は、大学にはほとんどいません。やはりどちらかなのです。

金水 旧大阪外国語大学統合時から CSCD のメンバーになられた高田珠樹さんも同じようなことをおっしゃっていますね。そういった葛藤のもとで授業が行われた時に、それに対する感受性を持っている学生は何かを学ぶだろうし、「何か違和感があるな」と思いつつ、ずっとそれを持ち続けていれば将来何かになるかもしれないということなんでしょうね。「教授がおもしろがっているのを見せればいいのだ」というやり方は、ある種の教育観を持っている人から見れば、教育ではないということになりますよね。でもそういう変なことが行われているということも、大学の意味だと言いたい。

三成 そうなのです。だから池田光穂さんが学生から「先生楽しまれていますよね」と言われると素直に嬉しいとおっしゃる〔池田 2015〕のはわかりますね。ただ、それはそれでいいのだけれども、一方でその教育の成果は何かと問われた時には別の評価軸が必要になりますね。

— 人づくりを支援する「社会連携」事業

— CSCDのミッションの一つである「社会学連携」とは、もともと何をイメージして始まったものなのでしょうか。また、それが大学にとってどういう意味があるのかを、今一度考えてみたいと思います。

金水 社会学連携という考え方は鷺田さんの中にはずっとあったものだと思います。学生が社会に出ていった時のオン・ザ・ジョブ・トレーニング(OJT)の場としてCSCDを構想しておられたことは間違いのないけれど、しかし、それだけに収まらない、いろんなポテンシャルを街に返していかないといけないということも、鷺田さんの中にあっただのかなと思います。それで2005年から走り始めて、2007年の旧大阪外大との合併によって、社会貢献のあり方にまた幅が広がっていった感じでしょうか。

— 外大カルチャーというか、語学を軸に据えたりベラルさは魅力的で、学生を見ていると語学という軸さえ通っていたら何をやっても許されるというカルチャーから生まれてきているアクティブさは強みであり、おもしろくもあります。

金水 基本が、昔からの阪大生とは違って、発想が自由で外向きなのですね。

中岡 社会学連携について、はっきりしているのは「産学連携」ではないということでしょう。当時、大学の中でよく言われていた「産学連携」というものを意識して、それとは違う社会との連携のしかたを考えたということはありますよね。それはもうはっきりとしたスタンスでした。

— 「産学連携」ではないものが「社会学連携」であると言った時に、そこで言われている「産学連携」とは連携先の違いというより、特許やプロダクトに結びつくデザインというイメージが基本ですよね。企業も社会の一つです。その意味で「社会学連携」は街で何か“こと”を起こすというようなイメージに見えるのですが。

三成 そうですね。過去の産学連携の枠組みでは、結局プロダクト

でないものとの関係づくりができなかった。そうした関係を新たに担うということがCSCDで言う「社会学連携」だったんだろうと思います。ただ最近、企業も変わってきていて、そもそもモノづくりだけではなくて、モノをつくるための人づくりが必要だということに気づき始めている。人をつくるための人と人との関係が、まさに議論の中心になっているように思います。その意味で、企業との社会学連携も生まれてきていますね。このあたりのことは平田オリザさんも当初から指摘されており〔平田 2007〕、CSCDが担う大きな役割の一つだと言えるでしょう。

—— それは重要な点ですね。実際、企業の人たちとの勉強会に参加しますと、やはり対話というものが大事なんだということに気づいて一生懸命に取り組む人たちが、大学の中だけでなく企業や行政の中にも少数派だけれど一定数いることがわかりました。そういう状況の中で、対話の価値を訴える場が大学にあること自体に、それなりに社会的な、外部に対して一定の意味があると企業の方もおっしゃいます。大学が「対話が大事だ」と言うと、会社も動けるといいます。そういう点で、大学での我々の取り組みが、企業や行政で立場の弱い人たちをエンパワーしていることは事実だと思います。

中岡 アウトリーチという言葉もありますが、従来の教員が持っているものを「社会」に紹介するだけだったら一方向ですよ。そこが双方向だということがやはり大切だと思うので、一緒につくるとか、市民の側の日常的な知というものを受けとめるとか、これからもそこで何かをつくり出してくるということが本当は起こるべきことでしょうね。

金水 大学人が直接出て行って何かやる、市民に直接、反映するというのは、もちろん非常に大事なことで、本当に狭義での「社会学連携」だと思います。一方で、先ほどからお話に出ているように、やはり一定の社会的な機能を担う企業とつながっていくことは意味があることですよ。その点、京阪電車やアサヒグループとの連携〔写真5〕は大きい。



〔写真5〕アサヒ ラボ・ガーデン×CSCD 共同研究のようす

—— お話を伺っていて、私たちは今、戦前から続いている日本の大学のカルチャーと、戦後の日本企業の技術カルチャーの転換期にいることを感じます。この15年ほどの大きな社会変

革の最中にできた CSCD は、良くも悪くも時代をすごく反映していますね。結局、鷺田さんが CSCD を通して構想されたことは、大学にとどまらない社会の構造改革ではなかったかと思うのです。

金水 CSCD はたまたまこういう形（多様な専門を持つ教員が集まって運営する組織体）をとることによって実現できたことがたくさんある。そこには確固たる成功の部分があると思うのです。普通では成し遂げられないようなものを成し遂げた。しかし、一方で見せられないものもいっぱいあるわけです。そのすべてを俯瞰して CSCD を上から評価することは、今の私にはとても難しいですね。

(2014年12月8日 CSCD にて)

文献

- 池田光穂 (2015) 「CSCD は〈阪大生が阪大生になる場所〉」
『CSCD 2005-2014 BOOK』16-17。
- 小林恭・高田珠樹 (2010) 「座とコミュニケーションをめぐる」
『Communication-Design』3 : 328-341。
- 平田オリザ (2007) 「〈いい時代〉を生きるために」
『Communication-Design』0 : 20-26。